

(仮称)

自然ふれあいの森

ニュースレター 第02号

平成14年9月29日発行 発行：「(仮称)自然ふれあいの森」管理運営準備委員会

管理運営準備委員会報告

第5回/平成14年7月27日(土) ワークショップ
第6回/平成14年8月31日(土) イベント

初めての現地(鉢ヶ峯)でのイベントを終え、メンバー全員が「ふれあいの森」に対する認識を深めた後に行われた第5回目の管理運営準備委員会では現地探索の成果を写真等を用いながら地図上にまとめる作業を行うとともに、次回のイベントに関するテーマや内容についての話し合いが行われました。

前半に行われた前回のイベントのまとめ作業では、各チームで歩いたエリアや着目したポイントが異なっていたため、「探検」的な活動をした

チーム、「植物観察」に特化したチーム、などそれぞれで特色が分かれ、完成した地図も多彩なものになりました。

また、後半に行った次回のイベントに関する話し合いでは、メンバーの家族や友人を招く形での若干規模を大きくしたイベントの提案も出されましたが、結果的に、「メンバー自身がもう少し現地のことを知るべきだ」という意見が大半を占め、再度現地探索を行うことに決定しました。



さらに、この現地探索とともに今後の活動拠点(ベースキャンプ、救護スペース)づくりを目的とした里山管理体験(下草刈り)を併せて行おうということにもなりました。前回のイベント企画時と同様、後日メンバーからの有志によるイベント企画会議が行われ、プログラム内容や活動場所、当日のスケジュール、準備物、など企画の詳細が話し合われ、決定しました。

管理運営準備委員会委員 忽那 裕樹

森と人との新しい関わり方を求めて

森は、地域の環境に適合する、長期にわたって安定な構成をもつ群集、すなわち極相林へ遷移してきます。里山は極相林に向かう森を、ある意味で無理やり人為的に遷移を止めている状態であるといえます。人の手が入り続けなければ、俗に言う山が荒れて人が入れない状態になります。

前回、里山の環境に携わる人が減ってきており、森と人との新しい関わり方を求めていくことが大切であるという話をしました。農文化に支えられた関わり方とは異なる視点も必要となるでしょう。ここでは、ユニークな事例を紹介します。

クリストというアーティストがいます。彼は、茨城の里山の環境に巨大な傘を立てていく「アンブレラプロジェクト」を試みました。たてる場所をクリスト自身が地元住民と交渉しながら決定していったのです。カリ

フォルニアでは黄色の傘を展開し、2つを同時開催したのです。鮮烈な印象を与えた傘の立ち並んだ風景を、多くの人々が体験し、対話の中から日本の里山の素晴らしさを住民が再認識し、新しい可能性を議論するきっかけともなりました。我々が守り育ててきた環境とカリフォルニアの環境を比較することからも、それぞれの良さを見いだすことにつながったのです。

「森の学校」でも次世代を担う子供達と共に、自由な発想で里山と関わることを模索したいと思います。既成の考え方ではなく、里山を「感じる」ことから始め、様々な人と対話すること。その中から新しい関わり方が見えてくると思います。



「森の学校」第二回(全四回)
自然ふれあいの森

「里山管理体験と現地を知ろうⅡ」

第6回管理運営準備委員会では8月31日（日）9：30に集合し、午前中は現地に活動拠点を作る為に草刈などの作業をしました。自分達で作った活動拠点でお昼ご飯を食べた後、6コースに分かれてそれぞれ森を探索しました。

午前中は2つの場所に分かれてどの草木を刈る必要があるのかを学びながら活動拠点作りを始めました。まずは道具の使い方のレクチャーです。汗だくになりながら約3時間の作業が終わるとそこにはとても気持ちのいい空間が広がっていました。自分たちの手で作った活動拠点でどんなイベントを開催しようかと相談しながらおいしい昼食を頂きました。



下草刈りにはげむ市民委員。約3時間の作業で2つの活動拠点、(仮称)コナラの丘と(仮称)アラカシ広場をつくりました。



まずは、本日の作業内容の説明から



作業に使用する道具のレクチャーを聞きます



午後からの班分けを活動拠点で話し合う。



できた活動拠点、(仮称)コナラの丘に全員集まって、おいしく昼食をいただきました。



探索中に会ったヤマモモの大木

午後からは6つのコースに分かれて森の中を探索です。植生調査に行った班、道なき道を探検した班、緩やかなコースをお散歩した班と色々な形で森と接しました。暑くて少ししんどかったけどこの森と近づけたような気がしました。



楽しく植生調査にはげむ4班。シリブカガシの木を中心とした約15m四方の区域の植生を調査しました。



道なき道を行く1班

ちょっとお勉強のコーナー その2

「木の名の由来について」

樹木の多くは昔より人の生活と深く関わりを持っていました。そのため、その名前には庶民の生活上の体験の中から自然発生的に生まれたものが多いです。そこで今回は自然ふれあいの森に生育している樹木を中心に、樹木の名の由来についていくつかある説の中で興味深いものを紹介します。

サクラ

- ① 此花之開耶姫をまつる伊勢朝熊神社に桜樹を植えて置としたと伝えられており、「さくや」が転じてサクラになった。
- ② 「咲きむらがる」がなまった。
- ③ 「ははか(ウワミズザクラノ古名)」が「サクラ」に転訛した。

シリブカガシ

そのドングリのお尻がくぼんでいることに由来している。



お尻がくぼんでいる

コナラ

- ① 「ナラ」には平らという意味があり、コナラの葉が広く平らであるからその名がついた。
- ② 秋の紅葉を風がナラすから。
- ③ 朝鮮語のkalakがなまってナラになった。



リョウブ

「令法」とかき、古くから救荒食糧であった。そのため律令国家の時代に農民に対しリョウブの植栽を命じる官令が発せられ、こうした官令、すなわち令法がそのまま木の名前となった。

ソヨゴ

堅い葉が風に吹かれてささやかと音を立てるので「戦ぐ(そよぐ)」から名前がついた。

マツ

- ① 冬も緑の色を変えず、風雪にも耐えている様子が何かを持つ(マツ)ているようであるから。
- ② 「真常木(常緑樹の意)」が「マツの木」になった。
- ③ 松の葉が二股に分かれていることから「マタの木」となり、それが転じて「マツの木」になった。





どんぐりチーム

「里山管理を体験しよう!」 津田麻知子さん

8月31日(土曜日) やや蒸し暑いながらも、お天気に恵まれ我がどんぐりチームは、アラカシ丘高約300mを駆け上りました。まず倒木を片付け、草刈り・あけのきを取り除き、低木を切り倒しながら、ネズミは主に電動機具で刈取っていきま

した。午前中は約1時間半の作業で汗を流したあとで、みんな揃って御弁当を食べ1時より尾根の散策や植生調査等の班に分かれて行動しました。その後、夏原先生のご指導の下で行われた植生調査班に加わり、シリブカガシの木を中心とした約1.5m四方の区域で調査を体験することとなりました。植生調査で分かったことは、1.コシダが群生している。2.コクラシと言ふ雑草類では珍しい品種を見つけることができた。3.シリブカガシが高木の中心的存在としてあちこちで見られました。4.カスミザクラは反対に枯れたものが多く見られ保護の大切さを感じました。

参加者の酒井和子さんは動植物にとっても詳しい知識を持っておられて、いまの季節によくみられる道徳・チョッキリ虫の生態について説明をしてくださりました。チョッキリ虫はコナラの「どんぐり」の実に卵を産み付け、まだ実が青い内に産み付けた卵を殻から切り落とします。なぜかと言えはコナラの「どんぐり」の実が成熟して硬くなる前に、切実が未成熟のままに殻から切り落とされた軟らかなこの実を食べるのです。

「ふれあいの森」での共同作業第一回日の成果は、私たちが守って行こうとしている土地を、実際に自分達の足で歩いて自然を体験したことにあります。自然を愛することは自然を知る事から始まります。そして人間にとって自然の大切さを痛感して、次世代へ自然を繋ぎ渡していくことこそ、私たちに課せられた宿題であるのかも知れません。



みのむしチーム

「森よ!里山よ!蘇れ」 森下義男さん

21世紀に入り、世界的(地球規模)に自然と環境に対する改善取り組みが、会議や実践で盛んに進められてきています。これは近年ですスピードで地球温暖化が進行し、やっと人々が気が付きやうやう社会全体(行政・企業)が環境問題なしで存続できない状況下にあるからです。

今人々は常にプラス面を積み続け開発の手を止めることなく自然界を壊し続けることにもならないからだと思います。30年前〜40年前は、どうであったか?同じ豊かさの中にも自然が多くあって、四季の移り変わりもはっきりしていて(気温、雨量、空気)不安のない豊かさにゆとりを感じられた時代ではなかったでしょうか。

私達「自然ふれあいの森-管理運営準備委員会」の仲間達は、ワークショップと実作業活動と、合わせて月1ペースで(市民参加型ボランティア活動)進めている小さな組織体ですが、今の社会ではこれが最も大切なことで、自覚が必要だと考えています。

この21世紀は自然との共生がいかに大切かを思い起こして、一人一人が今日自分が自然界(生態系の保護と保全)に何が出来るかを考えて行動と言葉していくことが最も大切で必要な事ではないでしょうか、多くの仲間達と汗を流して未来へ向け復元し、森の保護と保全をどうしても軌道にのせたいと願っています。実際に作業してみると何十年も人手の手で保護・保全がされていない森は死んだようになっていることに身をもって体験しています。

これからも仲間達と一緒に「みんながふれあえる森-癒しが出来る森」作りへ活動をおこなっていきます。イベント開催時には多くの市民の方々の参加を切にお願いします。



さのこチーム

「里山林の遷移からみた南部丘陵」 清水俊雄さん

ふれあいの森計画地は南部丘陵地と呼ばれ、和泉山脈を後背地に望山林・柳田・小川川、たぬ池など多様な環境が豊かな生態系を形成している。古くから中山間地域の田舎や里山林は、人の利用関係がうまく調和して今日まで保全されてきた。また里山林は農林業の生産の場であると共に市民が身近にふれあう安らぎ空間でもある。次に南部丘陵地望山林の歴史的背景を遡ってみる。

【陶器発祥地と須恵器】 古墳時代400年頃東北丘陵地一帯(含南部丘陵地)は陶器とよばれ卑土より陶工が渡来し、登り窯による須恵器(須恵器)の技術が伝えられた。その後平安時代まで須恵器の生産地として栄えた。

【木炭から植生を語る】 古代の須恵器の登り窯跡を調査した西田正樹氏は須恵器の使用年代が推定できる窯跡の木炭に着目した。東北丘陵の窯跡の木炭の種類を分析した結果5〜6世紀頃までは、カシなどの常緑広葉樹(照葉樹)から6世紀後半から8世紀前半にかけては、アカマツが木炭原料として使われた。

【里山林の収奪】 須恵器の生産は大量の薪炭材を必要とし、新しい場所へ森林の収奪が繰り返された。平安時代には東北丘陵の里山林は減少していき、やがて陶器の須恵器の生産も終焉に向かう。

【照葉樹林からアカマツ林へ】 8世紀後半から10世紀前半にかけての東北丘陵が照葉樹林からアカマツ林に遷移したのは、薪炭林の伐採、肥料としての落葉の採取など森林の収奪が土壌の劣化や土壌浸食を招き照葉樹林が衰退したからだ。やせ地に育つアカマツが勢力を拡大させ、それ以来千年あまり繰り返された森林の収奪によりアカマツ林は維持された。

【里山放棄でアカマツ新選】 石油やプロパンガスの出現により土より出て土に落ちるといふ里山本来の循環システムが断たれていった。一方、利用されない里山林は近代化が進み、アカマツ林から照葉樹林へと遷移していく。喰い虫被害も里山のアカマツを減少させている。また人手の入らなくなった里山の管理対策問題もある。

【よりよい里山環境を次世代に】 里山は人の利活用空間のみではない。多様な生き物の生態空間を保全しつつこれまで守り育ててきた先人に学び負荷のない里山環境を次世代に引き渡したい。



はっぱチーム

「里山管理第一便」 原田克史さん

楽しいというより作業はむしろ面白かったのである。頂上ではツツクツクホーンの新やかな声援が響く。私には山の気持ちがかかる。彼らはこのように言っているのだ。「原さん、山の管理に来て下さってありがとう。私達も精一杯声援を送りますから、どうかきれいに手入れをして下さい。そしてこのお山を守ってください。オーツツクツク」。

まごころで取り組み始めばまごころからの声援が返ってくる。その上、仕事は面白い。なんと痛快なことではないか。作業はかどるにつれ心はいよいよ元気がだ。これもやりたし、あれもやりたし、次にはそちらもせにゃならん。心はまことに運ましく自覚になってゆく。

そんなのだ我々は永世を見通した壮大なスケールの保護と環境保全へ向けての確かな野望に燃えておらねばならない。

いよいよの武將が袂を離したように、われわれは緑なる城をどしどし築いて参らねばならん。これはわれわれが大柄になるといっていい。大柄は自然界なのだ。われわれは自然界の手足となって森林や里山やうらに奔走する精進を目指して参るのだ。

夢は果てしもなく広がってゆきます。これは山の心が私に訴えかけているのです。山は人の心を素直にして丈夫に育んで下さいます。道元禅師さんは、その著「正法眼蔵」の中で「おおよそ山は国界に属せりといえども、山を愛する人に属するなり。聖賢や木にすむとき、やまこれに属するがゆえに、樹石藤花なり、鹿麋麝香なり。これ聖賢の徳をこぼらしむるゆえなり。しるべし、山は賢をこのむ実あり。聖をこのむ実あり」と説かれていますが、それに習えば「山はまごころの人をこのむ」ということも出来るのではないのでしょうか。私などもまだまだ「まごころ」には遠いものです。けれども多少しでも心をこめた思いで臨めば、山は深い慈しみをもって応えて下さる。そのように思っています。



問合せ先

「(仮称)自然ふれあいの森」
管理運営準備委員会 事務局
堺市 公園整備課 | 株式会社 緑景
TEL:072-228-8174 | TEL:06-6763-7167
FAX:072-228-1336 | FAX:06-6765-5599

ホームページアドレス

<http://sakaisatoyama.cool.ne.jp/>

アクセス方法



東北高速鉄道
泉ヶ丘駅下車
南側2番のりば
鉢ヶ峯行き
公園墓地北口下車
(約15分)